

## 高度成長時代の立役者

東京都千代田区の霞が関ビルディング(以下霞が関ビル)。地下3階地上36階建て。日本最初の超高層ビルである。戦後、日本の高度成長時代を象徴するビルとして名を成している。所有者の三井不動産㈱(本社・東京)にとっても社名が広く知られるようになった記念碑的ビルである。

施工は鹿島建設㈱と三井建設㈱(現 三井住友建設㈱)の共同企業体。工事は昭和40年(1965)3月に起工、同43年(1968)4月、竣工。このビル建設に挑んだ人物が、当時の三井不動産代表取締役社長、江戸英雄(1903-1997)である。都市の上部空間活用への初の挑戦だった。

霞が関ビル35階のレストラン従業員によると、北方に「晴れた日、筑波山が見える」という。江戸の故郷は、その筑波山ろくにある。筑波郡作岡村(現 つくば市)に明治36年(1903)7月、父茂一郎、母ゆきの子として誕生した。5人兄弟の末っ子である。

家から自転車で下妻中学校(現 下妻第一高等学校)に通い、創立されたばかりの旧制水戸高等学校(茨城大学発足時に包括、以下水高と略)に進学。後年、江戸は水高合格を「飛び上がらんばかり喜んで、手の舞、足の踏むところを知らず」といい、「自分の一生の中であんなにうれしかったことはない」(『私の履歴書』)と振り返っている。

東京帝国大学(現 東京大学)に進み、昭和2年(1927)卒業。三井財閥の親会社・三井合名会社に入社した。当時の日本は不況のどん底。昭和7年(1932)、三井合名の團琢磨理事長が三井銀行本店(三井会館)玄関で射殺された「血盟団事件」を目の当たりにしている。

敗戦を江戸は「日本として史上最悪の瞬間」ととらえ、「日本民族はどんなことがあってもくじけてはならない。立ち上がらなければならぬ」(『私の履歴書』)と誓っている。戦後の日本復興と高度成長の真ただ中を生きた江戸の信念が見える。

## 江戸英雄

Edo Hideo

財閥解体に遭遇し、昭和22年(1947)、三井不動産に入社。江戸の信念は、この会社を通して結実していく。

三井不動産は三井合名の不動産部門を切り離して昭和16年(1941)に設立。同30年(1955)、代表取締役社長となった江戸は、千葉県から要請があった市原地区の大規模なしゅんせつ埋め立て事業を引き受けた。会社としては初めて取り組む新分野の事業である。

京葉臨海工業地帯埋め立て事業に進出した三井不動産は、全国の主要なコンビナート造成に関わった。江戸の水高後輩にあたる岩上二郎元茨城県知事(故人)が推進した鹿島臨海工業地帯の造成でも知事の要請に応え、積極的に協力した。

また、水高後輩にあたる後藤田正晴元内閣官房長官(故人)は、『江戸英雄追悼集』の中で鹿島臨海工業地帯造成について、江戸が岩上元知事の農工商全の県政推進に賛同し、水路建設や企業誘致に協力したと記す。そのうえで岩上元知事は「先輩は有り難い。江戸先輩に大変、お世話になっている」と話していたことを書きとどめている。

鹿島開発だけではない。江戸は筑波研究学園都市建設や常磐新線(現 つくばエクスプレス)計画にも深い関心を寄せていた。そこには、日本全体を見ながら郷土茨城の発展にも心を砕いていた姿がみえる。(文中、敬称略)

## 主な参考文献

『私の履歴書 経済人18』(昭和56年、日本経済新聞社発行)、『江戸英雄追悼集』(平成10年、「江戸英雄追悼集」編集委員会発行)、『筑波町史下巻』(平成2年、つくば市発行)等



超高層時代の幕開けを告げた霞が関ビル  
=東京都千代田区霞が関3丁目(筆者撮影)

## 歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長  
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「信念」のヒント